



思いの  
交  
差  
点

設立20周年記念誌

公益財団法人 せんだい男女共同参画財団

財団は2001年の設立当初から、  
女性のエンパワーメントに向けた事業を展開し、  
「男女平等のまち・仙台」の実現を  
目指してきました。

わたしたちの隣には、いつも市民の皆さんがいます。  
女性たちが出会い、つながり、

課題解決に向けて取り組んできた20年間です。

これからも、思いが交わり、

新たな行動を生み出す場でありたい。

そんな願いをタイトルに込めました。

これまでとともに歩んでくださった方も、

はじめましての方も、

仙台のより良い未来のために、

わたしたちと今・ここから動いていきましょう。



## 目次

|    |  |
|----|--|
| 1  | 東日本大震災からの10年   |
| 8  | 市民活動スペースの歩み<br>ともに成長するということ                          |
| 15 | 「先達に聞く」2016-2020<br>長く活動してきた女性たちが語る、<br>「次世代に伝えたい思い」 |
| 20 | 歴代理事長クロストーク<br>これまでと、これからと                           |
| 27 | 仙台の動き  |
| 28 | 経営基本方針<br>わたしたちの北極星☆                                 |



公益財団法人  
せんだい  
男女共同参画財団  
設立20周年



2011  
東日本大震災からの10年  
2021



ただ元に戻るのではない。  
女性が二度と同じような困難にあわないこと。  
日頃から女性が今以上に責任を分かちあう社会を目指すこと。  
財団が「あの日」から何を考え、何に取り組んできたか。  
その足跡を、震災後に関わりを深めた方の  
言葉とともにご紹介します。



I  
2011  
3月11日  
—  
2012  
10月

## 被災直後の支援活動

### ～日本女性会議

### 2012仙台

2011年3月11日。二館の男女共同参画推進センターも被災し、休館しました。復旧と並行して、電話相談などの女性支援に着手。エル・ソーラ仙台を、人や情報が集まる拠点にしました。支援に動く女性たちと立ち上げた「せんとくネット」は、現場で見た課題を共有する場。

洗濯代行事業は新たなニーズの発見や、「被災地には行けないけれど何かしたい」女性たちがボランティアとして力を発揮する機会にもなりました。復興の担い手になることで人は力を取り戻すという実感と、女性の困りごと想像力を働かせるという視点を得ました。

エル・パーク仙台の再開後は、市民グループが活動を通して日常を取り戻す姿に力をもらいました。2012年の日本女性会議のテーマは「ぎめるうごく東北から」。女性たちには社会を変える力もあるとの思いを込めました。運営ボランティアを含め、誰もが「語り手」となり、被災地の今を発信する。この経験は2015年の「国連防災世界会議」にも引き継がれます。

#### 2011年(平成23年)

##### 3月11日 センターの被災・臨時休館

- エル・パーク仙台:スプリンクラーの破損による水損被害、設備の損傷など
- エル・ソーラ仙台:仕物の倒壊や図書の落下など



##### 3月29日 「女性の悩み災害時緊急ダイヤル」開設(～7月23日)

- 相談件数:324件、主な相談内容:暮らし、夫婦、家族問題
- 7月下旬から通常の相談業務として電話相談を継続

##### 3月下旬 講座を震災対応の内容に

- 「女性のエンパワーメントシリーズ」わたしをいたわるから始めよう
- 「子育てママのこころの手当て」など

##### 4月3日 ポータルサイト「被災したわたしたちが「今、ここ」をのりきるために」開設

- 女性のエンパワーメントにつながる支援情報や女性たちの声を掲載
- 5月から「わたしのペースでゆっくりと」に名称変更(～2013年5月)

##### 4月5日 エル・ソーラ仙台再開

- 29階を「こころと暮らしの立ち直りを支援するスペース」として開放
- エル・パーク仙台の市民活動スペースの機能を一時移転



##### 4月上旬 「せんとくネット」始動

- 「せん」だいの女性たちが被災した女性の本音を「たく」さんくみとって、一緒に解決する「ネット」ワーク(財団と女性支援者との連携)



##### 4月17日 洗濯代行事業スタート(～8月10日)◆

- 避難所の女性の洗濯物を預り、延べ287名の女性ボランティアが洗濯
- 5か所の避難所(若林体育館、荒町市民センター、七郷市民センター、岡田小学校、南三陸ホテル観洋)の延べ520個の洗濯物に対応

##### 5月下旬 プラ・サニタリーを届けよう!(～6月17日)◆

- 避難所で聞いた、「自分に合うサイズの下着やサニタリーショーツがない」という声から企画
- 全国から募った多様なサイズ・デザインの下着約2,300枚を避難所へ

##### 6月上旬 MDGガールズプロジェクト～女子による女子のための震災ピアサポート◆

- 大人と子どものはざまで、支援が届きにくい中高生女子に焦点
- 宮城学院女子大学とドレメファッション芸術専門学校的女子学生が当事者の気持ちに寄り添った支援を展開
- 仙台市、石巻市、名取市、南三陸町で「ティーンズ女子会」を開催(7月～2012年3月)。全国から募った「プレゼント(≠支援物資)」などを提供



◆マークは「せんとくネット」関連事業

##### 6月16日 エル・パーク仙台5階フロア再開

- 市民グループがセンターでの活動を再開
- 掲示板「つながる」で、財団と関係団体の活動状況や来館者のメッセージを紹介



##### 9月21日 エル・パーク仙台6階ホール再開

#### 2012年(平成24年)

##### 7月上旬 市内の仮設住宅を訪問、女性たちとの交流が始まる

- 女性たちの「手仕事」との出会い
- 「日本女性会議2012仙台」など様々な事業で経験を伝える語り部に

##### 10月26日 「日本女性会議2012仙台」(～10月28日)

- 9つのプログラムで被災地の現状を発信、全国から約2,000名が参加
- センターで活動する市民グループなど延べ153名の運営ボランティア
- 会議の成果「仙台宣言」はその後の財団事業の拠り所に
- 会議の剰余金をもとに、翌年「復興と女性性基金」を設立(～2015年12月)



## 千年に一度の災害は、千年に一度の学びの場

南三陸ホテル観洋女将 阿部 憲子さん  
あべのりこ

2011年3月11日。南三陸町の志津川湾に面した当館は指定避難所ではありませんでしたが、近隣住民がぞくぞくと避難してきて、当日は350名、翌日は600名以上になりました。不安は伝播し、泣き出すスタッフも出てきたので「心を強く持つて」と伝えました。スタッフは家族の安否や家の状態が分からないまま、使命感を持って対応してくれました。待ったなしの判断が必要な状況下では、率先して動いてくれるリーダーが必要だと感じました。

ライフラインの復旧はなかなか進まず、電気は2か月、水道は4か月かかりました。川で洗濯をするような状況で、女性たちは大変苦労していました。そんな時、財団から「洗濯ボランティア」の申し出をいただきました。はじめは汚れた洗濯物をお願いすることに抵抗があったようですが、財団の職員の方が自治会のミーティングで丁寧

に説明してくださり、支援を受けることが決まりました。子どもも洗濯物が入っていると、「依頼者に戻す時にぬいぐるみを入れてもいいですか?」とご提案いただくこともあり、ありがたい支援でした。その後も様々な事業にお声がけいただいたり、「決める・動く(P6参照)」の研修で宿泊いただいたりと、交流が続いています。

### 「プロフィール」

震災時は自主的に宿泊客と地域住民の受け入れを行い、命を繋いだ。県内のホテル旅館の女将たちでつくる「みやぎおかみ会」会長。



## つながりを力に変えて

チームはぎ 赤間 優子さん、遠藤 正子さん  
あかまゆうこ えんどうまさこ

赤間 震災前は地域との接点がなく、避難所で話す人がいなかったのです。糸を持っていた遠藤さんに「手芸が好きなんですね」と話しかけたのが、まさか10年一緒にいることになるとは。この出会いがなかったら、孤独だったと思います。

遠藤 赤間さんとは年代は違っても、価値観が一緒。避難所で支援のお礼にと手仕事品を作り始めて、仮設住宅で話し合いながら仕組みを整え、販売も行うようになりました。

赤間 仕事をもらえるのが励みになったと話す人もいて、みんなの張り合いになっていったと思います。

遠藤 あれだけの被災をしたのだから体験を伝えなければと、「日本女性会議」の被災地視察に協力しました。北海道の方が「仮設は寒いと聞いたから」と、後日靴下やカイロに手紙を添えて送ってくれました。

赤間 2018年に女性の手仕事をテーマにした映画のチラシを置

いてもらおうとエル・ソーラ仙台に立ち寄った時、相談に乗ってくれて一緒にイベントができたのは嬉しかったです。

遠藤 最近では、会を閉じることも考えています。心の復興には、痛みをわける人と話す時間が必要でしたし、今もみんなで集まるのは楽しい。でもいつかは区切りをつけたいいけないので、悩ましいですね。

### 「プロフィール」

宮城野区蒲生で津波により被災。仮設住宅で手仕事団体を結成し、「日本女性会議2012仙台」や国連防災世界会議「女性と防災」テーマ館に協力。



遠藤さん(左)、赤間さん(右)

II  
2012  
11月  
—  
2015

## ノルウェー基金事業 企業の未来プロジェクト

日本女性会議の翌月、復興の過程で女性が発揮できるようと、ノルウェー王国の支援により「東日本大震災復興のための女性リーダーシップ基金」が設立。市民グループと同国との長年の交流を背景に、当時の奥山恵美子仙台市長とアルネ・ウォルター駐日大使が女性の人材育成の重要性に関して意見交換したことがその始まりでした。

基金事業でチャレンジした領域は「企業」と「地域」。財団とまだつながっていない人たちがいかに関係を築いていくか。ノルウェーの役員育成プログラムを参考に開発した「仙台女性リーダー・トレーニング・プログラム」は初回から多くの企業の賛同を得て、現在までに149名が修了。職場で変革を起こす女性たちとそれを応援する企業の輪が広がっています。

国連防災世界会議ではエル・パーク仙台が「女性と防災」テーマ館となり、東日本大震災で直面した課題の解決に向けて、多様な側面から議論を深めました。

### 2012年（平成24年）

- 11月 「東日本大震災復興のための女性リーダーシップ基金」設立
- 通称：ノルウェー基金、事業期間：～2016年9月、支援額：約2,000万円
  - 下記の4つの柱で財団が事業を展開
    - ① 交流・招聘事業（ノルウェー王国視察研修など）
    - ② 女性リーダーシップ開発研究及び実践事業（企業・地域での女性リーダー育成）
    - ③ 講座・イベント（男女平等先進国ノルウェーの知見や文化を紹介）
    - ④ 男女共同参画センターネットワーク（センターの役割の可視化と相互支援システムの構築）



### 2013年（平成25年）

- 4月 仙台市が地域防災計画を全面修正
- 基本方針に男女共同参画の視点を明記
  - 男女共同参画推進センターを災害時の女性支援の拠点に位置づける（全国初）
- 7月 せんだい防災プロジェクトチームの結成
- 「女性の視点による地域防災ワークショップ」（6月実施）受講者有志と財団職員で結成
  - 避難所経験者へのヒアリングを重ね、避難所運営を考えるプログラムを開発
- 9月 男女共同参画センター「復興キャンペーンの展開（～2015年）」
- 全国女性会館協議会のキャンペーンにノルウェー基金事業の一環として協力
  - 全国の男女共同参画センターに財団職員を「語り手」として派遣
  - 被災3県（岩手・宮城・福島）男女共同参画センター復興推進会議の開催
  - 大規模災害時にセンター同士が支えあう「男女共同参画センター相互支援システム」の構築のプロセスに協力（2015年の国連防災世界会議で概要発表）

### 10月 仙台版防災ワークショップ「みんなのための避難所作り」完成・実施

- 多様性に配慮した避難所運営を疑似体験できるプログラム
- 進行台本などをまとめたテキストを作成・販売（2014年3月発行）
- カタールフレンド募金の助成により、英語版のテキストも作成（2015年3月発行）
- 町内会、市民センター、自治体、NPO等で開催（現在まで、延べ51回、1,453名参加）



### 2014年（平成26年）

- 2月 「震災が女性のライフコースに与える影響に関するパネル調査」開始
- 東日本大震災が女性の生涯に与える影響を探る（本調査は6月～現在も継続中）
  - 震災時に沿岸部に居住していた当時10代～60代の女性18名対象

### 4月 『バンジー～あの日うまれたもの』創刊号発行（～2021年3月）

- 女性たちの多様なリーダーシップの可視化（地域や企業など様々な分野で力を発揮する女性を紹介）



### 「きもちをつなぐバス」実施

- 仙台市沿岸部を巡るバスツアー
- 4月：全国女性会館協議会の会員館を対象に実施（参加者28名）
- 6月：仙台市内の女性を対象に実施（参加者16名）
- 2015年9月：福島県の被災地をめぐるコースを実施（参加者8名）

### 6月 「新浜女子会」との交流開始

- 沿岸部の宮城県新浜地区の女子会にオブザーブ参加

### 10月 「日本女性会議2014札幌」に企画参加

- 分科会「日常から考える、防災における男女共同参画」を仙台市と共催で実施

### 2015年（平成27年）

### 3月14日 第3回国連防災世界会議パブリック・フォーラム「女性と防災」テーマ館（～3月18日）

- 「女性のリーダーシップ」と「多様性」をキーワードに被災地の今とこれからの発信



- 14のシンポジウムと展示等の関連企画に延べ6,647名が来場
- センターで活動する市民グループなど延べ179名の企画・運営サポーター
- 本体会議で採択された「仙台防災枠組2015～2030」には「女性と若者のリーダーシップの促進」などが盛り込まれた



### 6月27日 『「仙台防災枠組」と女性のリーダーシップ』開催

- 「女性と防災」テーマ館フォローアップイベントとして実施（参加者84名）

### 10月 「企業の未来プロジェクト」スタート

- 在仙企業へのヒアリングや調査を重ね、女性管理職育成を目的とした「仙台女性リーダー・トレーニング・プログラム」を開発
- 活躍を期待される女性が企業からの推薦を受けて受講するエントリー方式
- 社内研修への講師派遣など、女性活躍推進の各種メニューを提供



## 自分らしさを楽しむ

パーソナルメイクアドバイザー 島<sup>しま</sup>望<sup>のぞみ</sup>さん

震災時は高校1年生。名取市閑

上の自宅は津波で流されました。

学生時代、「女の子なんだから」と

言われることに違和感があり、男

女平等に興味を持つようになり

ました。大学1年生の時に「ノル

ウェー王国視察研修」に参加。同

世代の大学生たちが自分の意見を

伝え、それが社会に受け入れられ

る環境に衝撃を受けました。

早くから自立を促す子育てをし

ていることも印象的で、母となっ

た今、自分の子育てにも大きく影

響いています。夫は会社で初めて

の男性育休取得者になりました。

「授乳以外のすべてをやる！」と

言ってくれて、心強いパートナーです。

2020年8月にメイクとパー

ソナルカラー診断で起業。今は、20

〜30代の女性や男性を対象にした

メイクレッスンが中心ですが、震災

以来ずっと住んでいる仙台への恩

返しとして、企業向けにも何か新

しい事業ができないかと模索して

います。

私自身がメイクで自信を持てる

ようになり、自己肯定感が上がっ

た経験があります。自分の人生は

自分のもの。誰かのためにではなく、

自分が楽しむために外見から内面

を輝かせましようと思えています。

子育てを楽しみながら、自分のや

りたいことをやる。そんなロールモ

デルになりたいと思っています。

### 「プロフィール」

「ノルウェー王国視察研修2013」

に参加。大学在学中から専門学校でメ

イクの勉強を始める。卒業後、化粧品店

勤務を経て起業。一児の母。



## 人とまちをつなげたい

株式会社ユーメディア 執行役員  
メディアクリエイション部長 門脇<sup>かどわき</sup>佐知<sup>さち</sup>さん

「仙台女性リーダー・トレーニング・

プログラム2015」を受講し、同

僚でも友達でもない、「同志」とも

呼べるつながりを得ました。つな

がりは自分を助けてくれるし、相手

を助けることもできる。修了者で

立ち上げたのが、「仙台働く女性の

ネットワークReaderLady(ラ

ディレディ、P6参照)です。仙台で

リーダーとして活躍する女性たち

がつながり、影響力を発揮してい

きたいです。

エグゼクティブコース受講中の

2020年秋には、執行役員に就

任しました。ステージが上がれば、

自分で決められることが増えてま

す。会社の仕組みや働き方を変え

るチャンスと思い、引き受けました。

就職した頃は、女性は結婚したら

仕事をやめる時代。周りの女性た

ちがやめていく中で考えていたの

は、仕事を通して社会に貢献した

いということ。働くことは、まちづ

くりそののだと思っています。

「せんだいタウン情報machic

o」の編集長も務めています。震災

時に、machicoを通して情報交

換する人たちを見て、まちと人のつ

ながりをあちこちにつくりたいと

思うようになりました。Reader

Ladyの働く女性たち、「女性た

ちの政策提言(P6参照)で出会っ

た多彩なフィールドで活動する女

性たち。それらをつなげて、みんな

で仙台を盛り上げたいです。

### 「プロフィール」

「仙台女性リーダー・トレーニング・

プログラム」期生、2020年には同エグゼ

クティブコースを受講。「仙台働く女性の

ネットワークReaderLady」事務局。



## 決める・動く ～女性たちの政策提言

国連防災世界会議で採択された「仙台防災枠組2015-2030」。それまで災害弱者とされてきた女性が、防災・減災の「推進主体」と位置づけられました。震災後、「女性支援」から「女性たちの多様なリーダーシップの可視化・発信・開発」へとステージを移してきた財団にとって、この枠組は取り組みのさらなる後押しとなりました。

2016年には、地域の女性リーダー育成を目指した「決める・動く」を開講。5年で108名の修了者を輩出し、まちづくりを担う女性たちのネットワークも生まれています。

2019年、企業・地域に向けた二つの女性リーダー育成プログラム受講者やセンター利用団体などの有志が「女性たちの政策提言」を作成。それぞれの生活実感に基づく課題をもとに、目指したいまちの姿と取り組みアイデアを盛り込みました。基本理念に女性たちが掲げた言葉は、「わたしたちがこのまちを創っていく」。財団は仙台の未来をつくる女性たちの力を信じ、つなぎ、ともに歩み続けます。

### 2016年（平成28年）

#### 3月12日 仙台防災未来フォーラムに「女性と防災まちづくり」のテーマで参画

- 国連防災世界会議の成果を継承する仙台市主催のフォーラムに2016年より継続して参画、女性の仕事ブースの発展も支援
- 2016:「トーク×トーク 女性たちのリーダーシップ2016」(参加者106名)
- 2017:ブース展示(財団の取り組み紹介)
- 2019:「みんなで防災まちづくり～女性も!若者も!」(参加者33名)
- 2021:「女性と防災まちづくり2021～誰もが暮らしやすい地域をつくる」(参加者48名)



#### 7月 地域版女性リーダー育成プログラム「決める・動く」開講

- 町内会などの地域団体やNPOなど活動のフィールドを持つ女性が対象
- 地域リーダーとして必要な力を磨く実践的なプログラム
- 「仙台防災枠組に関する自発的な取り組み(Sendai Framework Voluntary Commitment)」として、国連が承認



### 2017年（平成29年）

#### 11月 『よりよく生き延びる-3.11と男女共同参画センター』出版

- 財団職員の震災から約7年間の歩みをまとめた書籍を新潮社より発行



#### 11月26日 世界防災フォーラム/防災タボス会議 @仙台に「女性と防災まちづくり」のテーマで参画

- 「仙台防災枠組」の推進を目指した国際会議に2017年より継続して参画
- 2017:「トーク×トーク 女性たちのリーダーシップ2017」(参加者143名)
- 2019:「防災まちづくりと女性のリーダーシップ」(参加者104名)



### 2018年（平成30年）

#### 8月 「自立を目指す女性のための“学び直し”を通してキャリア支援事業」開始

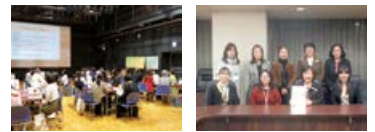
- 文部科学省「男女共同参画推進のための学び・キャリア形成支援事業」実証事業に採択、10代で十分な学びの機会を得ることができなかった女性(若年無業のシングル女性や転職・就職を目指す母子家庭の母等)が対象
- 個々の状況に合わせたキャリア支援と伴走型の学習支援を並行して実施
- キャリア支援を仙台市母子家庭相談支援センター及びエル・ソーラ仙台就業自立相談、学習支援を(一財)学習能力開発財団が担当

### 2019年（令和元年）

#### 9月 新総合計画に仙台の女性たちが声を届けるプロジェクト(～12月)

- 仙台市が新総合計画(2021～2030年度)を策定する機会をとらえ、仙台の女性たちの声を集め、政策提言するプロジェクト
- メンバーは「仙台女性リーダー・トレーニング・プログラム」「決める・動く」「ジェンダー論講座」受講者、せんだい防災プロジェクトチーム、センター利用団体の参加者有志(延べ90名参加)

- 5回のワークショップ・報告会を行い、12月に「女性たちの政策提言」を郡和子仙台市長に提出



### 2020年（令和2年）

#### 2月 仙台働く女性のネットワーク Radi-Lady(ラディレディ)結成

- 「仙台女性リーダー・トレーニング・プログラム」の修了者によるネットワーク
- 働く女性の悩みの共有やスキルアップを目指し、次の世代につなぐ

#### 9月 企業の未来プロジェクト「仙台女性リーダー・トレーニング・プログラム」エグゼクティブコース開講

- 経営戦略、イノベーション、財務などの講義とトップリーダーとの対話を通して、経営者の視点を獲得するためのプログラム
- 企業の部長相当職・役員候補の女性が対象



### 2021年（令和3年）

#### 3月13日 「女性たちが語る 震災からの10年」開催

- 10年間の取り組みの成果と課題を共有し、未来につなぐトークセッション(参加者151名、うちオンライン視聴89名)
- 「パンジー～あの日生まれたもの」展を同時開催



## 良くするために、声を上げよう

仙台市民生委員児童協議会 副会長  
高砂第二地区民生委員児童協議会 会長  
三浦 忍みうらしのぶ さん

「決める・動く」は5年間で100人の受講目標を達成したら終了と当初は聞いていました。2021年度以降も継続できることになり、良かったと思っています。女性リーダーが100人では足りない。「数は力」と言うように、200人、300人、それ以上になって、どんな地域をリードしてもらいたい。中学校のPTA会長をしていた時、会議では何も話さず、終わった後に下駄箱の前で文句を言って決定を覆そうとする女性たちを見ました。決める場で、自分の意見を正当に主張できるようにしてほしい。批判するというよりは、良くするために声を上げることが大切だと思います。

「決める・動く」に推薦する女性たちには、「あなたはできる人だから、研修に参加してください。理由は自分で見つけてください」と言って送り出しています。高砂第二地区の毎月の定例会では受講者が学んだ内容を発表し、周りの



【プロフィール】  
1992年より民生委員を務め、まもなく30年を迎える。震災時には避難所の運営管理者として尽力。2018年より「決める・動く」に受講者を推薦。

人の刺激にもなっています。自分が選んだ人が成長する姿を見るのは嬉しいこと。私自身、人にかを頼まれたら、必要とされているんだ、期待に応えたいと思って行動してきました。それが結局自分のためにもなる。女性たちにも、断る理由より受ける理由を大事にしてもらいたいですね。

## 新しい世界との出会い

つながる「決める・動く2018」修了者  
堀江 美恵子ほりえみえこ さん

チラシをたまたま見つけて参加した「ジェンダー論講座」で、学生さんを含め、色々な世代の人と話したのがとても面白かったです。女性の生きづらさが語られ、私は間違っていなかったと思いました。「決める・動く」では自分の資質を知るとともに、自身の言葉で話す女性たちに出会いました。人前で話すってすごい。「女性たちの政策提言」でもそう思いました。私の世代の女性は補助的な仕事をさせられることが多かったので。新しい人や世界を知るワクワク感で財団の様々な事業に参加してきました。「決める・動く」の同期が地方選挙に立候補し、その手伝いをしたのもいい経験です。

ひきこもりの当事者やその家族の女性たちが集う場をつくっています。私自身が母との関係に長年悩み、自分の体を傷つけ、入院もしました。震災の頃は人に対して心を閉ざしていて、そこから1か月く



【プロフィール】  
「2017年度ジェンダー論講座」受講者でつくるG15（ジェンダーフューチャー）メンバー。「決める・動く2018」、「女性たちの政策提言」に参加。

ともにも成長する  
ということ

市民活動スペースの歩み

市民活動と「出会う」、  
市民活動を「応援する」空間として、  
2003年にリニューアルした  
エル・パーク仙台「市民活動スペース」。  
2021年3月までの18年間、  
財団が市民協働のひとつのかたちとして、  
特定非営利活動法人イコールネット仙台に  
運営を委託してきました。  
一緒だから気づけたこと、一緒だからできたこと。  
これまでの歩みや大事にしてきた思いを  
3名の方々にうかがいました。



特定非営利活動法人  
イコールネット仙台

2003年設立。「生活すべて」  
をテーマに、男女共同参画  
推進に取り組む。



代表理事  
宗片 恵美子 (むなかた・えみこ)さん



オープン当初から運営に携わる  
佐藤 勝子 (さとう・かつこ)さん



元スタッフで、現在は理事を務める  
内田 有美 (うちだ・ゆみ)さん

## 愛着のある場所

——「イコルネット仙台」立ち上げの経緯を教えてください。

**宗片** 私と勝子さんは、社会学級の研究会で出会いました。いろいろなテーマに巡り合う中、社会学級卒業後の1992年、女性の健康問題を発信していこうと、「グループイー（アイ）」を立ち上げました。最初の活動が人工妊娠中絶に関するアンケート。リプロダクティブ・ヘルス/ライツの考え方がまだ一般的ではなく、まわりから違和感を持たれることもありましたが、びっしりと書かれた回答が集まりました。女性たちが自分の経験を話す機会が必要だったのだと、少し自信が持てました。

自主グループを立ち上げ、自分たちで活動の場所を探している時にエル・パーク仙台を知り、よく通って愛着のある場所になりました。たくさんの人たちと出会ったのも衝撃でしたね。「杜の伝言板ゆるる」を立ち上げた大久保朝江さん、「せんだいファミリーサポート・ネットワーク」

## わたしたちの

### 女性センターを実現する会

**宗片** エル・パーク仙台で活動するグループが増え、手狭に感じるようになりました。1995年に仙台市が新しい女性センターを太白区長町につくるといふ発表を聞いた時は、



すごく嬉しくて。市民参加の女性センターをつくってもらおうと、「わたしたちの女性センターを実現する会」ができました。エル・パーク仙台で活動していた人たちが立ち上げたので、私たちも「グループイー」から参加したんです。

「国際婦人年みやぎ婦人のつどい」の平沢きょうさんと私が共同代表をさせていただき、どういう機能があったらいいかアンケート調査をしたり、他の施設の見学に行ったり、すごく燃えました(笑)。提言をつくって市長まで届けたりして、精力的に活動しました。結局女性センター建設計画は凍結されてしまいました。その提言のひとつに「男女共同参画に特化した、専門性を持つ財団をつくらせてください」というのがありました。

## イコルネット仙台の設立

——女性たちの後押しもあり、2001年に財団が設立。2003



利用票から抜粋した利用者の声を、オープン当初から毎月、紹介してきた。「その時々のおんさんの感想が一目でわかる、大切な記録です(宗片)」

年にはエル・ソーラ仙台が開館し、「仙台市男女共同参画推進センター」の二館体制がスタートしました。

**宗片** 二館体制になるという方針が出た時、会の中が反対派と受け入れ派に分かれました。それほど、新しいセンターに対するみんなの思いは強かったです。とにかく男女共同参画を押し進めていかなければならない。それならばセンターを利用しながら、市民参加型の運営もできる団体をつくらうと、会を発展的に解消して

「イコールネット仙台」を設立。市民活動スペースの管理運営団体の公募に手を挙げて、採用していただきました。

佐藤 応募資格に「法人格を有する団体」とあったので、急いでNPO法人化しました。

宗片 利用する側だったので、必要なものを自分たちはしつかりと認識できている自信があったのです。「私たちはみんなのニーズがよくわかる。私たちがやる他はない」と、プレゼンした憶えがあります。

### 敬意を持って接する

——利用者だからこそニーズがわかるという一方で、利用者から支援者になることへの戸惑いはありませんでしたか？

宗片 戸惑いはたくさんありました。支援する側だという意識が強く出てしまうと、利用するグループの人たちに伝わりますので、対等な関係をつくっていかねればと積み重ねながら感じてきました。

市民活動をしている人たちはみんな

な活動に自信を持っているので、敬意を表するのが大事だと思いましたね。コミュニケーションをとるにしても、最近の活動の様子などを聞きながら、次はどういうことが私たちにできるかなと考えて。私たちが市民活動団体なので、利用する人たちが安心感を持ってくれたと思います。

——関係性をつくるコツはあるんですか？

宗片 コツはないの。積み重ねだと思えますよ。信頼関係を築いたり、話してくれる関係性をつくったりするのはそう簡単ではないので。アルバイトから常勤スタッフになった内田さんは、距離のとり方がとても上手。声かけの仕方や関係性のつくり方をスタッフ全員が大事にできた結果が今に至っていると思いますね。

内田 宮城学院女子大学大学院の院生の時、浅野富美枝先生に社会勉強をしておいてと言われて、アルバイトで入りました。イメージしていた接客とは違い戸惑いはありませんでしたが、あまりバイト経験もなかったので、そういうものかと(笑)。一番



デートDVや婚活など、時事的なテーマなどを取り上げた「女の本音！男の本音！アンケート」は、スペースをふらっと訪れる利用者にも男女共同参画に関心を持ってもらうための工夫のひとつ。

嬉しかったのは、バリバリ活動をし、意見もバンバンおっしゃる方が私の名前を憶えてくださったこと。いろいろな話をしてくださるようになり、ああ、溶け込んできたなと思いました。利用者みなさんの活動を間近で見ってきた経験は、自分自身がその後市民活動に取り組む上で、大きな糧となりました。

宗片 「男女共同参画推進せんだいフォーラム」の事務局をしていた時期

もあり、スタッフ全員が参加グループと深く関わってきました。東日本大震災の時も、今のコロナ禍でも、市民活動スペースを閉室せざるを得ない状況になりました。そういう時は、再開をずっと待っている方々への声かけを大事にしています。震災の後、市民活動スペースの機能を移転していたエル・ソーラ仙台に、グループの人たちが心配して訪ねて来てくれて。積み上げてきたものが、お互いの気持ちの交流につながったのだろうと思います。日頃からのコミュニケーションが大事だと、あらためて痛感します。

### 災害時における女性のニーズ調査

——市民活動スペースの管理運営と並行して、イコールネット仙台独自の様々な事業にも取り組んでこられました。東日本大震災より前に、「災害時における女性のニーズ調査」を行ったきっかけを教えてください。

宗片 国立女性教育会館の研修で、



「ウィメンズネット・こうべ」の正井 禮子さんから「阪神・淡路大震災で、男性より女性が1000人多く亡くなった」という報告を聞きました。それまで「災害と女性」に意識はあまり向いていなかったのですが、話を聞いて、災害ではこういうことが起こるのだと実感したんですね。

当時、宮城県沖地震も30年以内の発生確率が99%と言われていました。2008年に「災害時における女性のニーズ調査」で女性たちの心配や不安を調べ、2009年に「女性の視点からみる防災・災害復興対策に関する提言」としてまとめたところ、全国的な関心を集めました。

防災担当者や消防局などに売り込んで、報告会をさせてもらったのですが、参加者は全員男性。女性は一人もいなかったですね。提言のタイトルが「女性の視点からみる…」なので、「災害が起きて大変なのは女だけじゃない。男も大変なんだ」と必ず言われて。この調査を行った時は、まだまだ風当たりが強かったですね。



——東日本大震災の前後で、反応は変わりましたか？

宗片 当初は変わらなかったです。でも、私たちだけでなく、いろいろな人がこの問題を発信するようになったので、「なんで女だけなんだ」と表立っては言わない雰囲気になってきました(笑)。

### せんだくネット

宗片 調査の報告書をまとめた2年後、東日本大震災が起きました。調査をしていて良かったのは、すぐに避

難所に入れたこと。「避難所で絶対こういうことに困っているよね」というのが、だいたい予測できましたから。――財団が「せんとくネット（P2参照）」を立ち上げて、女性による洗濯代行のボランティアを始めたのは、宗片さんとの話し合いがきっかけでした。

宗片 ああのボランティアは本当に良かったと思います。避難所の体育館で、「こういうのはとても出せない」と見せられた洗濯物が泥んこで。

「大丈夫だから。それを詰めてください」と言った覚えがあります。あの時洗濯してもらえたことが、みなさんとても嬉しかったようです。そこで出会った女性たちとの関わりは、今も続いています。

運搬する人には洗濯物が見えないようにし、洗濯する人は持ち主の顔が見えないのでプライバシーは守られます。単なる洗濯代行ではなく、人権に関わる取り組みでした。その後も、下着や裾上げなど必要なものを率直に言ってもらえるようになりました。

――「私も必要性がわかるから」と、避難所で暮らしていたことのある女性や、日頃から市民活動スペースで活動しているグループの方も洗濯ボランティアにはいらっしやいました。そういう女性たちの力がなかったらできなかったですよ。

宗片 そうですね。避難所ではズボンの裾をみんなはさみで切っていたから、ギザギザで。「語り手たちの会・みやぎ」の竹丸富子さんたちが率先して裾上げをしてくれました。

内田 私は、洗濯ボランティアで洗濯物を運びながら、性別によってこれほど大変な思いをすることに衝撃を受けました。その時に、セクシュアルマイノリティの人たちはどうしているのだろうと思って。宗片さんや浅野先生の後押しもあり、当事者への調査に取り組みました。その調査で、セクシュアルマイノリティの人は避難所に行くこと自体にも壁があることに気づきました。自分のライフワークとして、この問題をきちんと発信していかなければいけないと思います。

## 女性たちがもつと

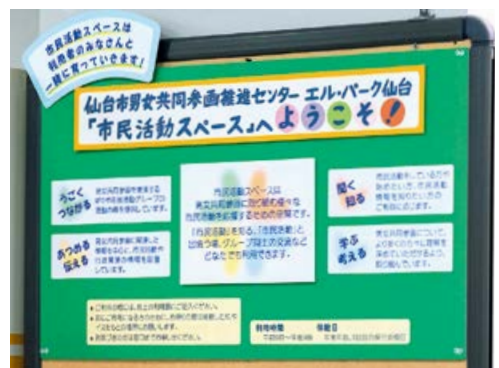
### 地域で活躍できるように

――東日本大震災を経験して、イコールネット仙台の取り組みにはどのような変化がありましたか？

宗片 避難所や仮設住宅に支援に入って女性たちと一緒に時間を過ごす中で、「お父さんが帰ってきてから決めるから」と言われることがたくさんあって、「今ここで決めようよ！」とつい言ってしまいうくらい歯がゆい思いをしました。

困難を抱える女性たちを見て、これを変えなければと思ったことは、その時その時に伝えてきたつもりです。それで頑張ってきてみようかなという人や、避難所で中心的な役割を担う人も出てきました。でも、女性たちが自分から手を挙げたからといって、簡単に受け入れてもらえるわけではなく、システムや環境も整えないといけない。

まずは人材育成が必要という思いから、「女性のための防災リーダー養成講座」を始めました。東日本大



震災で大変な思いをした女性たちが手を挙げて参加してくれた、そこに意味があると思うのです。自分たちが抱えた困難を次の世代に経験させばという気持ちで育っていたところに、この講座をつくったのはとても良かったと思っています。

――生活の場である地域に切り込む手法として、女性防災リーダーの養成は実効的なものだったと思います。女性たちが、地域で活躍するための基盤づくりも必要ですね。

**佐藤** 地域の防災リーダーの長は男性が担うことが多くて、防災の分野は男性の役割という意識が根強くあります。

**宗片** 「講座が終わってからは本番です。地域でしっかり活躍するまで私たちが応援しますから」と言ってきました。だから受講した人は、今も地域でいろいろな活動をしています。でも、NPOが育てた人材が地



市民活動スペースを拠点に活動しているグループの活動内容を壁面や展示テーブルで紹介。「わかりやすく伝えられるように、グループの方と何度もやりとりしながらつくりました。他会場でのイベントに持ち出すほど気に入ってくれた方も（内田）」

域の中で信頼を得て活動できるかという点、必ずしもそうではない。

それならば仙台市が主催する「仙台市地域防災リーダー（SBL）養成講習」も受けてもらうことにしました。SBLになれば、信頼を得て活躍できる道はあると。ほとんどみんなSBLになってくれました。地域の意思決定に入り込む人材を育てたいというのが、講座を始めた当初から考えていたことでした。私たちの講座でいろいろな視点を育て、それを土台にしてSBLを取得し、地域で活躍してもらいたい。財団の「決める・動く（P6参照）」を受けた方もいるので、かなり力はいっているはずです。

もっと女性たちの背中を押したい。女性たちがそれぞれの町内会に戻った時に主体的に活動してほしい、そういう仕組みをつくりたいと思っています。地域に受け皿がないと、女性たちも意欲を維持できないのではないのでしょうか。

私たちの講座を参考にして、北仙台地区では、連合町内会が主催で



若い世代に市民活動への関心を持ってもらおうと始めた「若者のための市民活動体験」。大学の先生に協力いただき、学生さんとグループをマッチングしました。大変好評で、今後も続けていきたいです。（宗片）

「女性防災リーダー」を養成していきます。地域で人材を育てるのが一番だと思うので期待しています。

## 震災10年を迎えて

——東日本大震災以降、イコールネット仙台の取り組みが全国的にも注目を集めてきました。これからどのようなことを行う予定ですか？

**宗片** 2011年9月に「東日本大震災に伴う『震災と女性』に関する調査」を行って、宮城県内の1500人の女性たちの声をまとめました。震災から10年の節目に、その後継調査をしようと思っています。

2012年に「40人の女性たちが語る東日本大震災」という聞きとり集をつくり、2016年に再び同じ方々に調査を依頼しました。そうしたら、半分の方にしか協力してもらえなくて。体調を崩している方や、もう話したくない、思い出さたくないという方もいました。目に見えないところにも震災の影響はあるだろうと思いますし、女性たちの状況がこの10年でどのように変わっているのか、把握したいと考えています。

震災後に様々な活動をする中で、石巻市や東松島市、岩沼市など被災地の女性たちのネットワークとつながれたのは、大きな成果でした。各地のキーパーソンの女性たちに協力をお願いしながら、10年目の調査をまとめる予定です。

## 出会いが育んだもの

——最後に、これまでを振り返り、何を思いますか？

**佐藤** 私は宗片さんと出会えたことが一番良かったですね。これから元気な80代の坂を登れるのも、宗片さんのおかげだなと思って。他の人ができない経験を、私はずいぶんさせてもらった。スタッフにも恵まれて、若い人たちのエネルギーを吸収できました。それで18年も続けられたと思っています。

**宗片** 私と勝子さんの関係はもう20年を超えているのでね。本当に助けられました。

**内田** 二人のスピード感がすごいですよ。やると決めたら、すぐ動いている。特に震災の調査の時は、必要だよねと言ってから調査するまでが本当に速かった。常にいろいろな社会課題を見つけ出して、先へ進む二人の姿勢が勉強になりました。市民が課題意識を持って活動していくスタイルを見せていただきました。

他の団体の活動からも多くのことを学びました。震災で何かが必

要だとなった時、ぱっと集まってグループができる様子を近くで拝見して、NPOは横に連携していけることを知りました。自分の所属団体のセクシュアルマイノリティの活動でも、いろいろなグループと接点を持って、連携の輪に入れるように、私もブラッシュアップしていきたいと思っています。

**宗片** このスペースでたくさんの人と出会えたことが、私の財産です。自分の学びや成長にもつながる刺激的な時間でした。今、これだけの活動ができるのは、市民活動スペースで出会った活動や女性たちのおかげだとあらためて強く思います。市民活動をしていくというのは、私自身にとっては生き方そのものですので、これからもこういうふうが続いていくのだろうと思います。ここで仕事ができた18年間は、とても幸せな時間でした。

——私たち財団の職員はイコールネット仙台から学んだことがたくさんあります。これからも一緒に「男女平等のまち・仙台」に向けた取り組みを進めていきたいと思っています。本日はありがとうございました。



利用者ととも市民活動スペースを育ててきたイコールネット仙台のみなさん

# 長く活動してきた女性たちが語る、 「次世代に伝えたい思い」

2016年よりエル・パーク仙台で開催してきた「先達に聞く」。  
女性たちの草の根の活動を伝え、  
思いを引き継いでいきたいとスタートしたこの企画は、  
これまでに23名にご登壇いただきました。  
先輩たちが切り拓いてくれた道の上に、私たちは生きています。  
敬意と感謝をこめて、皆さんの言葉をご紹介します。

先達に聞く  
2016  
|  
2020



大橋 京子 さん

おおはし・きょうこ  
NPO活動任意団体 MADAMADA 代表  
[2018]

どこにも自分の居場所がないと思ったら、  
自分でグループを立ち上げてほしい。  
一人からでもいいです。そして二人になり、  
三人になり、複数の仲間ができれば、  
そこから何か始まると思います。

どんな状況でも、自分で考え、決定し、  
行動を起こしていく力を育て、  
社会に変化をもたらすことのできる少女に  
育ててほしいのです。

渡辺 紀 さん

わたなべ・のり  
ガールスカウト宮城県連盟  
第10団 団委員長  
[2016]



庄子 千枝子 さん

しょうじ・ちえこ  
グループ「花」元代表  
[2018]

自分が何かをしたいと思ったら、協力してくれる方、  
支えてくれる方がきつといらっしゃると思うんです。  
だから夢に向かってやってみよう、  
できなくてもできなくても前に進んでいこうと思います。

\*所属・肩書・団体の名称等は、開催当時のものです。  
\* [ ] は開催年

\*「先達に聞く」報告集は、せんだい男女共同参画財団ホームページ  
からダウンロードできます。全文は、ぜひそちらをご覧ください。

エル URL <https://www.sendai-el.jp/>



### 酒井 文子 さん

さかい・ふみこ  
みやぎ親子読書をすすめる会 代表/  
みやぎ子どもの文化を支援する会  
代表  
[2016]

絵本は大人が子どもに読んであげるもの。  
それから、絵本にこめられた作者のメッセージを、  
読む人が子どもたちに伝えるということ。  
これがとても大事だと思います。

わたくしの底辺には、  
人間が大好きということが流れております。  
わたくしのお気に入りの「心豊かに」という言葉  
おそばにおいでいただければうれしゅうございます。

### 門井 和子 さん

かどい・かずこ  
生涯一主婦、一市民  
(元・翔の会)  
[2016]



### 鈴木 房子 さん

すずき・ふさこ  
みやぎの食を伝える会 監事  
[2019]

「母の背中を見て育つ」「継続は力なり」  
「人の役に立つ活動」。この3つの思いを胸に、  
会を益々発展させ、我々自身も努力しながら、  
地域に貢献していきたいと思います。

自分の蓄積を活かしながら、  
結婚する・しないに関わらず、  
自立を求めつつ社会とつながることは、  
生きる喜びなのです。

### 天野 清子 さん

あまの・きよこ  
21世紀をひらくみやぎ女性のつどい  
共同世話人  
[2016]



### 佐々木 政子 さん

ささき・まさこ  
新日本婦人の会  
宮城県本部 副会長  
[2019]

活動の原点は、農業を守ること、  
働く人たちを大切にすること、平和を守ること。  
様々なことに取り組めるのも、平和であればこそ。  
女性が声をあげ、誰もが自分らしく生きられる社会、  
世界をつくっていきましょう。



竹丸 富子 さん

たけまる・とみこ  
語り手たちの会・みやぎ  
代表  
[2019]

「声は耳に届ける音のまなざし」と言われるくらい、  
ことばに含まれる愛情や慈しみを、  
子どもはしっかり受け取っています。  
ことばは人間の気持ちであり、  
愛情なのだということを、  
活動の中で実感しています。

人間の命にとって

“水”というのは欠かせないもの。

次の世代、その次の世代にもきれいなままで  
残してあげたいのです。

酒井 由布子 さん

さかい・ゆふこ  
仙台石けんをひろめる会  
代表  
[2016]



川端 英子 さん

かわばた・ひでこ  
のぞみ文庫 主宰/  
仙台にもっと図書館を  
つくる会 代表  
[2018]

誰もが自由に利用できる図書館をつくることは、  
平和を創り出す土壌を耕すこと。

どんな子どもたちも、幸せに、その人生を生きてほしい。

そのために「世界には平和を、仙台にはもっと図書館を」を  
モットーとしております。

激動の時代を生き抜いた、祖母や母たち、  
歴史の表舞台に出ることのない女性たちの「戦争はいや」  
「こんな経験を二度と、誰にもさせたくない」という強い思い。  
これが私の原点です。

木村 さち子 さん

きむら・さちこ  
ノルウェーに学ぶ会 代表  
[2016]



三橋 芳子 さん

みやはら・よしこ  
北京JAC仙台 事務局  
[2018]

女性自身が、女性ということだけで、  
手を結ぶべき。その手を結んだわたたくしたちの、  
ありとあらゆるつながりが政治とつながっています。  
みんなで声をあげ、行動する必要があるのです。

なぜ学校図書館は必要なのでしょう。  
子どもたちが学校生活や日常の中で  
「知りたい・読みたい・学びたい」と思った時、  
本や情報と出会う、  
一番身近なところだからです。

袋 浩子 さん

ふくろ・ひろこ  
学校図書館を考える会  
みやぎ 会員  
[2019]



中村 祥子 さん

なかむら・しょうこ  
認定特定非営利活動法人  
グループゆう 代表理事  
[2020]

24年の活動のなかで、思考・感性・情報・体験の違いで  
人々の行動が分かれることを実感しました。  
思考や感性は他者が如何ともしがたいものですが、  
情報・体験は思考を変えて  
感性に変化をもたらす可能性を持っています。



“本物はなにか、真実はなにか”をしっかりと見極める。  
そのために自分をきちんと見つめて磨き、  
仲間とのネットワークを大事にしていく柔軟性を  
持ってほしいです。

佐川 美恵 さん

さがわ・みえ  
政治を考える女性の会 幹事  
[2016]



平 和子 さん

たいら・かずこ  
仙台石けんをひろめる会  
幹事  
[2020]

天然油脂でつくられている石けんは、  
排水されて海にたどり着くまでに分解され、  
小魚や水草、水生昆虫などには害はなく川も汚しません。  
水や環境にやさしく、私たちの身体にも良い石けん製品を  
未来のためにもぜひ選んでほしいと思います。



原発ではなく、自然エネルギーによる発電の実用化に、  
もっと力を入れるべきです。  
このままだと、私たちの世代だけでなく、  
子々孫々がリスクを負うことになるからです。

竹内 貞子 さん

たけうち・さだこ  
県立高校共学教育の  
充実を求める会 幹事  
[2019]



いくら女性が増えても、  
まだまだ働く環境は良くなっていません。  
これからの人たちを失望させないためにも、  
活動を続けながら後輩たちを  
支えていきたいと思っています。

三塚 雅子 さん

みつつか・まさこ  
宮城県女性薬剤師会  
会長  
[2016]



田所 希衣子 さん

たどころ・きいこ  
外国人の子ども・サポートの会  
代表  
[2020]

私たちは学校の先生でも塾の先生でもありません。  
子どもたちの家族になったような気持ちで、  
日常的に親が子どもの宿題をみるような  
活動をしています。

平和憲法ができて74年。  
今、私たちは戦争で死ぬことはありませんが、  
平和を脅かす出来事は次々と起きています。  
いつか来た道を戻らないように、  
指の間から幸せがこぼれ落ちないように、  
一緒に声をあげ、行動していきましょう。

奥山 悦子 さん

おくやま・えつこ  
婦人民主クラブ  
宮城県支部協議会 事務局長  
[2020]



谷地森 涼子 さん

やちもり・りょうこ  
女性学を学ぶ会・仙台 会員/  
政治を考える女性の会 幹事/  
一般社団法人大学女性協会  
仙台支部 顧問  
[2018]

毎月の例会は、日常生活の中に潜む差別、  
性別役割分業意識など、  
気になることを自分の言葉で話せる居場所です。  
仲間と問題を共有し、話し合うことによって、  
自分のジェンダーバイアスに気づく学習になるのです。

「男性は上で女性は下、物事の決定権は男性」  
という態度の人はまだまだいますが、  
そこに息苦しさを感じている男性もいるのです。  
いつか「男性の解放」について男女間で話し合い  
ができれば面白いだろうなと思っています。

斉藤 ツメ さん

さいとう・つめ  
北京JAC仙台 世話人/  
ノルウェーに学ぶ会 会員  
[2020]



歴代理事長  
クロストーク

この20年、財団は何を課題と捉え、  
どのような役割を果たすことができたのか。  
未来に向けて、どう動くのが。  
歴代の理事長が  
存在意義や展望を語り合いました。



**水野 紀子**

(みずの・のりこ) (左)

現理事長 [2020.6～現在]

東北大学法学研究科教授を経て、2020年4月より白鷗大学法学部教授。専門は、民法・家族法。法制審議会（法務大臣の諮問機関）の各種部会で民法改正作業に従事。

**遠藤 恵子**

(えんどう・けいこ) (中)

初代理事長 [2001.4～2013.3]

東北学院大学教養学部教授を経て、2006年に山形県立米沢女子短期大学学長（～2014年）。専門は家族社会学。財団アドバイザー・フェローとして、調査研究の助言を行う。

**木須 八重子**

(ぎす・やえこ) (右)

第2代理事長 [2013.4～2020.6]

1978年仙台市役所入庁。女性企画課長などを経て、2010年に宮城野区長（～2012年3月）。国際コーチング連盟プロフェッショナル認定コーチ。

これまでと、  
これからと

財団設立と  
「二つで一つ」のセンター

水野 2021年4月で、財団は設立20周年を迎えます。これまで牽引してくださったお二人と、この20年を振り返り、この先の財団の在り方を考えていければと思います。どうぞよろしく願います。

水野 もう20年ですね。

遠藤 10周年の記念誌に、「もう10年・まだ10年」というタイトルで書かせていただきましたが、「もう20年・まだまだ20年」という思いは同じです。

思い返せば、財団の設立には、エル・パーク仙台で活動していた女性たちが、専門性を備えた専管財団の設立を要望してくれたこと、そして、行政側に男女共同参画に理解の

ある女性職員が複数人いらっしやっ  
て、後押ししてくださったことが大  
きかったと思います。

**木須** 「国連婦人の10年（\*1）」以  
降、女性センターをつくろうとい  
う全国的な動きの中で、仙台市で  
は役所内に専門部署が設置され、  
1987年のエル・パーク仙台の開  
館、1991年の仙台市女性行動計  
画の策定、そして2001年の財団  
設立、2003年の男女共同参画推  
進条例の制定という5本柱が揃い、  
行政として盤石な基盤をつくるこ  
とができました。

**遠藤** エル・パーク仙台ができて市  
民活動が活発になると、あっとい  
う間に手狭になったのです。そこで新  
しい大型の女性センターの建設計画  
が立ち上がりますが、財政上の理由  
などで実現が困難になりました。

**木須** 当時私も担当部署にいました。  
「わたしたちの女性センターを実現  
する会」をはじめとする市民の方々  
の思いをなんとかしたいと、紆余  
曲折を経て、アエルビル内にエル・  
ソーラ仙台をつくり、二つの館の管

理運営を行う専管財団を設立するこ  
とになったのです。調査研究や相談  
事業企画、交流など男女共同参画セ  
ンターの本来の機能を二館で分担す  
るため、市民の方々と意見交換しな  
がら構想を練り直しました。

**遠藤** 2006年に当時の市長がエ  
ル・パーク仙台廃止を含めたセン  
ターの見直しの検討を発表した時、  
市民グループが約1万4千名の反対  
署名を集めました。その運動からも、  
市民に守られ、成長してきたセン  
ターであり、財団であると言えるこ  
とを思います。

### ジェンダー論講座

**水野** 市民の力と行政のキーパーソ  
ンに後押しされ、財団とセンターが  
できたということですね。財団の機  
能についてはどのようにお考えでし  
たか？

**遠藤** ベースとして重要なのは調  
査研究だと当初から考えていまし  
た。調査研究から見える日本の構  
造的課題やジェンダー問題を学ぶ

「ジェンダー論講座」を、  
エル・ソーラ仙台が開館し  
た2003年から続けて  
います。その中で、男女  
共同参画は女性の問題で  
はなく、全人類の問題だ  
と伝えていきます。産業面  
で見ると、かつての重厚  
長大産業(\*2)では男性  
の労働力が非常に重要  
でしたが、今は情報産業  
がGDPでも大きなウェイトを占め、  
サービス産業も含めて労働人口も多  
い。これからの社会では、性別を問



2019年度ジェンダー論講座



わない労働力が想像力を生むし、ま  
すます大事になってきます。その意  
味では、センターはもっと大きな役割  
が果たせるのではないかと思います。

**木須** ジェンダー論講座を始めた時  
は、仙台市内で女性学をしっかりと  
扱っている大学が少なかったことも  
あり、自分たちの考えや行動を理論  
的に支える哲学や思想を持つために  
は、学術的な分析や研究を共有して  
いく必要があるだろうと考えました。  
その頃の公民館教育、社会教育分野  
では、ジェンダー問題を専門に取り  
上げることは難しい面があったので、  
非常に意味がありましたし、これが

らも必要だと思っています。

**水野** 修了生がその後もグループをつくって活動を続けているのは、遠藤先生の講座がそれだけ魅力的だったからだと思います。

## 震災からの気づき

**水野** 東日本大震災を経て、まるで紀元前紀元後のように、震災前とは大きな断絶がある気がします。

**遠藤** ジェンダーの問題は災害の時にこそ表に出てくる。だから日常的に男女共同参画を実践していないとダメなのだと言感させられたのが震災でした。

**木須** 男女共同参画行政を担当する中で、特に難しいと感じていたのは労働の分野でした。最初の行動計画に働く女性の支援という文言を入れたものの、それを保障したり実践したりする権限はなく、仙台市政だけでもできない。歯がゆい思いをしました。

もう一つは決定の場への女性の参画をどうしていくか。家庭教育の中

でいかに家庭や地域に貢献するかという時代でしたから、ハードルの高さがあったと思います。そんな行政上の力不足は解消されませんでした。

震災が起き、様々な壁が女性たちを立ちふさぎ、私たちはその姿を目の当たりにしました。当時、財団設立から10年。女性ももっと自分の意見を言えるようになってきたのではなかったのか、いったい私たちは何をしてきたのか。当時の職員、災害対策の現場にいる私も、そのように感じていました。

## 新たなスタート

**木須** その課題に向き合うことが、新たなスタートでした。そして水野先生に実行委員長をお引き受けいただいた「日本女性会議2012仙台（P2参照）」の開催につながってきました。

**水野** 全国的、また国際的な広がりがある場にはありました。やはり生身で会って話をするのは違いますね。とてもエポックメイキングな会



日本女性会議 2012 仙台 特別プログラム

議だったと思います。

震災で「ハサミ状格差」といわれる現象が起きました。それまで一定の幅の中で共存していた人々が、資産などがあって被災地から逃げ出せる人と、もちろん、あえてとどまる人もいますが、逃げ出したくても被災地にとどまらざるを得ない人々に大きく分かれてしまう。同様に組織の運営においても、平時にはトップが有能であろうが無能であろうがそれなりに組織は回るのですが、非常時には誰がトップかによって、大学でも企業でも自治体でも、ものすごく

差が開いた。平時にはなんとなく情性でやってきたものが、いろいろなかたちで赤裸々に見えた気がします。

あの時、宮城野区長が木須さんだったことは区民にとって幸運だったし、仙台市長が奥山さんだったことは市民にとって幸運だったけれど、そうではないところもあるのですよね。力のある女性たちが現場で活躍してくださった例もありますが、できなかったところもありました。ケアを担っている女性たちが一番ニーズを理解しているのに、その声を聞き届ける仕組みが現場になかった問題もありました。そういった課題をこの10年でどれだけ可視化できたでしょうか。

**木須** 震災前は危機管理、災害の現場は男の仕事というイメージがあったと思います。ところが、被災の現場には男性も女性も、高齢者も子どももいます。元気な男性の発想だけでは多様な人々をサポートできません。発災直後も、避難所、仮設住宅、その後の住まいに移っても同じです。復興という日常を取り戻すためのプロセスに女性の声、生活感覚を無視



することはあり得ないだろうと、地域再建の過程を見ていてあらためて思います。

この間、女性たちが担ってきたことや危機の中で発揮してきた力は、社会の再建に欠かせないものだという価値転換が、社会の側に必要ではないかと発信してきた10年でした。

### 日本社会の構造的問題

**水野** 震災の翌年の記録を読んでいたら、ジェンダー・ギャップ指数が

101位だと嘆いていたのですが、2019年は121位とさらに下がっている。背景にある日本社会の傾向を少し振り返ってみます。

江戸時代の女性の地位は、当時の東アジアの中ではとても高かったといわれます。当時は家職国家といつてみんなどこかの「家」に帰属し、武士でも町人でも百姓でも、その家の職業を営んで生きていました。家は、一種の法人でした。息子が優秀とは限りませんので、必ず娘婿を跡取りにするという家訓をもつ町人の

家も多くて、共同経営者であるおかみさん、妻の力は強かったのです。

「家」がセーフティネットになっていて、当主は丁稚のような使用人も含めて生存を維持する義務を負っていました。それが近代化でサラリーマン社会に変わった時、その役割が会社に移りました。日本の労働法は、極端に正社員の解雇規制が厳しく、労働組合も産業別労組ではなく企業別労組が原則です。「うちの社員の生存を生活給で守る」と。その代わり、社員は滅私奉公です。

近代化によって地域社会や大家族のセーフティネットが崩れたとき、人間が生きていくのに必要な「財」と「ケア」を社会福祉が下支えするのが近代国家ですが、日本では「財」は企業が、「ケア」は主婦が担保して、安上がりな軽量社会福祉で近代化が進められてきました。

ケアが必要な高齢者や病人、子どもを抱えると、現代の脆弱な小家族は大変です。介護については、介護保険制度の導入でずいぶん変わりましたが、育児支援は相変わらず手つ

かです。昔は育児をご近所や大家族の「群れ」で担っていました。そのサポートが崩壊して、コンクリートの箱の中で母親がひとり育てることになる。その負荷は母親にも子どもにもきついものがあるけれど、日本はその問題に介入せず、非常に貧弱な支援体制のまままきまして、女性たちはほとんど生きづらい状況になっていきます。

そういった意味でも、男女共同参画は、日本人が幸福に次世代を再生産していくための要となるムーブメントだと思っております。

### 財団ができること

**水野** 多様な人材を活かしている企業のほうが、業績を伸ばしているというエビデンスがはっきり出ています。しかし相変わらず日本の企業は古いですね。まあ、政治が一番古いのですが…。ケアの部分をそぎ落とした均質な男社会がビルドアップされており、それはすでに中にいる人にとっては居心地がいいというところ

が構造的な問題だと思います。根本的な解決のためには、介護保険をつくったように、ケアの部分をもっと社会で担うようにしなければならぬ。これは政治レベルでの大きな構造的転換と税金の使い方の転換が必要なので、財団ができることではありません。

しかし、調査研究を通して、何が日本の病理になっているのかを明らかにすることはできません。そして、その病理は子どもと子どもを抱える女性に現れますので、女性相談を担っている財団が一番察知できる状況にあると思います。財団が構造的な変革を直接的に行うことはできないけれど、問題があることを社会に発信する、あるいは政治家や行政に気づかせるという意味では、大きな役割を果たせるのではないのでしょうか。

**木須** 「政治分野における男女共同参画の推進に関する法律（\*3）」が2018年に施行されましたが、いきなり政治家になるというのはハードルが高いと思います。自分が住むエリアのまちづくりや、職場といった



仙台女性リーダー・トレーニング・プログラム 2020 修了式



## コロナ後の社会を 見据えて

小さなステージでしっかり力を磨いていきたいと思います、その動機づけや意味づけが大事だと思っています。この先10年を考えても社会を変えていくという意味では同じですから。

**遠藤** 財団は「企業の未来プロジェクト(P4参照)」や「決める・動く(P6参照)」でそこに取り組んできましたね。

それから、ジェンダー論講座の受講者の中から地方議員が3名誕生しています。ささやかな成果ですけれども。

**水野** いや、それは大きな成果だと思います。

**木須** 仮設住宅での暮らしや再建後の新しいコミュニティを見てきて、女性たちが他の人と関わることをいとわれない力、上下ではなく平場で関係をつくる力は本当にすごいなと感じてきました。震災前より女性たちの力は大きくなっているという印象があります。

**遠藤** 震災後10年間、女性のライフコースに与える影響に関する調査(P4参照)を続けています。その中で、女性の柔軟さやしたたかさが見えてきた気がします。

**木須** 今のコロナ禍の問題は、集まることができず、顔を合わせてのコミュニケーションが非常に取りにくいことです。

“Build Back Better”(ビルド・バック・ベター\*4)、より良い社会にするために、今、センターは未来に向けて何をやっていかな

ければならないのか。コロナ後にどういう社会をつくるのかということ、女性たちと一緒に考えたいと思っています。

**遠藤** ウイズコロナ、アフターコロナへの財団の関わり方は、やはり基礎データが必要になると思います。コロナ禍の女性たちの生活記録を取っておくことも大事ですね。

**水野** 女性たちが苦しんでいますよね。DVも増えるし、母子家庭の生活困窮、非正規雇用で仕事を失う人も。日本の構造的な問題がますます浮き彫りになりました。

**木須** コロナ禍の女性の困難は早々に取り上げられましたが、それに対する政策、救済がないのです。性別役割分担や家庭内のケアは無償だという価値観を変えないまま、緊急事態の名のもとに人々を家庭に戻しました。女性が今まで家庭内で担っていた役割は、人が生きていく上で不可欠だという価値観転換をして、きちんと評価すべきだと。そういうことをセンターはもっと発信してもよいのではないのでしょうか。

**水野** どんなかたちで発信していけばいいでしょうか？

**木須** オンライン上でのやり取りはコロナ禍で手に入れることができた新しいツールだと思います。良いものはどんどん取り入れましょう。何が課題かをいち早く考え、発信することが重要です。

## ともに変革の舞台を 大きくしていく

**水野** 財団は行政との関係が近いですから、渦中で苦しんでいる人と行政の支援を繋ぐハブの役割も果たせると思います。

**木須** 女性の力を借りたいです。「センターはこんなことをやっています」「周りの人に伝えてください」とか、そんな小さくても一緒にやるやり方もあるかなと思います。

**水野** 今は情報が溢れ、ネットで自分が読みたいものだけを読む時代です。その中で、財団が発信しているコンテンツはそれなりに信頼感があると思うのです。例えば、「自立を目



指す女性のための「学び直し」を通してキャリア支援事業（P6参照）では、参加者が成長の過程で複合的な困難を抱えてきていることが分かっています。それをどういうかたちで支援できるか、どうしたら本人たちが力を発揮していけるかということを考えながら事業を進めています。その成果を発信できるようにプラットフォームをつくってあげれば、ネットの力も大きく利用できるかもしれません。

**木須** 財団は市民の方々と一緒に歩み、支えられてきています。財団だけでやるのではなく、どんな力を貸

してもらえるか、その可能性はもっと考えていいと思います。賛同を得ながら渦をつくり、変革の舞台を大きくしていく。「草の根ジェンダー」と私は呼んでいます。市民とともに、「ポストコロナは男女平等の社会にする！」くらいの気概を職員には期待します。私たちがやろうとしていることって壮大でしょうか？

## 「群れで生きる」ためのハブ

**水野** 学生たちとオンラインでしか会えないと元気がもらえません。つ

くづく私は動物だなと思いました。たとえアクリル板やマスク越しであろうと、生身の彼らと会えると全然違います。人と会うことにはそういう力がある。例えば、家庭環境がすごく劣悪でも、近所の交通安全全のおじさんが「元気かい？」と言ってくれることが子どもにとってとても



自立を目指す女性のための「学び直し」を通じたキャリア支援事業

大きなことだったりします。群れで生きる人間としての力があって、ボランティアや市民の力で、子どもたちやDV被害者がふっと救われることはあると思うのです。市民の力は大きい。財団がそういうハブになれるといいなと思います。

**木須** 「群れで生きる」ためのハブですね。センターがそういうことを生み出したり考えたりできる場所であれば素敵だなと思います。コロナ禍であっても追求していく工夫ができてそうですね。

**水野** 本場に「頑張らなければ」と思い

ます。お二人には引き続き見守っていただければと思います。

本日はありがとうございました。

### \*1 国連婦人の10年

国連は1975年を「国際婦人年」と定め、同年メキシコシティで開催された「第1回世界女性会議」で女性の地位向上を目指した「世界行動計画」等を採用。その後の国連総会で1976年〜1985年を「国連婦人の10年」と宣言し、男女共同参画の動きが加速した。

### \*2 重厚長大産業

鉄鋼、造船、セメント、石油化学など大きくて重いものを製造する産業のこと。

### \*3 政治分野における男女共同参画の推進に関する法律

政策の立案や決定に多様な国民の意見を的確に反映するため、国会と地方議会の選挙で「男女の候補者の数ができる限り均等となることを目指す」と規定。政党に女性候補の擁立を促す努力義務を課している。

### \*4 Build Back Better (ビルド・バック・ベター)

日本語訳は「より良い復興」。災害後の復興段階において、災害前と同じ状態に戻すのではなく、次の災害に備えて、より強靱な地域づくりを行うという考え方。「第3回国連防災世界会議」で採択された「仙台防災枠組2015-2030」で提唱され、各国が合意した理念。

仙台の動き

|      |  |
|------|--|
| 2005 | スピーチテーブル「グロ」がエル・パーク仙台に<br>二館を管理運営  |
| 2004 | 「男女共同参画せんだいプラン2004」策定<br>仙台市男女共同参画推進センターの指定管理者として<br>二館を管理運営                 |
| 2003 | エル・ソーラ仙台開館<br>仙台市男女共同参画推進センター二館体制スタート  |
| 2002 | 「(仮称)仙台市男女共同参画推進センター」公布・施行<br>「(仮称)男女共同参画センター基本計画」策定<br>「仙台市男女共同参画推進条例」公布・施行 |
| 2001 | 財団法人せんだい男女共同参画財団設立<br>エル・パーク仙台の管理運営を受託                                       |
| 1998 | 仙台市が女性センター建設計画を凍結<br>「男女共同参画せんだいプラン」男女平等のまち・仙台<br>をめざして」策定                   |
| 1996 | 仙台市女性センター等基本構想委員会<br>「仙台市女性センター・子どもセンター(仮称)基本構想」<br>を市長に答申                   |
| 1995 | 「仙台市女性センター建設計画」発表<br>仙台市女性センター等基本構想委員会設置                                     |
| 1991 | 「仙台市女性行動計画」策定  |
| 1987 | 仙台市婦人文化センターエル・パーク仙台開館  |
| 1983 | 「(仮称)仙台市婦人文化センター建設基本計画」策定  |
| 1981 | (仮称)仙台市婦人文化センター建設検討  |



スピーチテーブル「グロ」



エル・ソーラ仙台  
市民交流スペース



財団広報誌「WM・ダブリュ・エム」  
創刊号(財団設立記念特集号)



「女たちのメッセージ」



141ビル外観(エル・パーク  
仙台開館当時)

|      |   |
|------|---|
| 2021 | 「男女共同参画せんだいプラン2021」策定<br>公益財団法人せんだい男女共同参画財団設立20周年<br>仙台及びエル・ソーラ仙台の一部を閉室                                 |
| 2020 | 新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、エル・パーク<br>仙台及びエル・ソーラ仙台の一部を閉室  |
| 2017 | エル・パーク仙台開館30周年  |
| 2016 | 「男女共同参画せんだいプラン2016」策定   |
| 2015 | 第3回国連防災世界会議においてエル・パーク仙台が<br>パブリック・フォーラム「女性と防災」テーマ館に<br>設置が明記される   |
| 2013 | 「仙台市地域防災計画」が全面修正され、災害時に仙台市<br>男女共同参画推進センター内への「女性支援センター」の<br>設置が明記される                                    |
| 2012 | 公益財団法人に移行<br>財団法人せんだい男女共同参画財団設立10周年<br>「日本女性会議2012仙台」開催<br>ノルウェー王国の支援により「東日本大震災復興の<br>ための女性リーダーシップ基金」設立 |
| 2011 | 「男女共同参画せんだいプラン2011」策定<br>施設の見直しによりエル・ソーラ仙台を改修<br>〈東日本大震災 発災〉<br>東日本大震災の影響によりエル・パーク仙台及びエル・<br>ソーラ仙台が休館   |
| 2009 | 「男女共同参画せんだいプラン」(2009-2010)策定<br>政令指定都市初の女性市長誕生  |
| 2007 | エル・パーク仙台開館20周年  |
| 2006 | 仙台市行財政集中改革計画に基づき既存施設のあり方<br>の見直しに着手   |



エル・パーク仙台30周年  
エントランス展示



第3回国連防災世界会議パブリック  
フォーラム「女性と防災」テーマ館



「東日本大震災復興のための女性  
リーダーシップ基金」協力協定調印式



日本女性会議 2012 仙台



エル・パーク仙台20周年  
記念イベント





経営基本方針

「わたしたちの北極星☆」

せんだい男女共同参画財団は、  
「男女平等のまち・仙台」を目指して、  
変革を起こし続けます。

一人ひとりの困難は  
社会の問題  
そのものであることを  
明らかにします

生きづらさや貧困、暴力被害など、  
女性が抱える困難の背景にある構  
造を明らかにし、社会全体で取り  
組むための視点を広く共有します。





多様な主体と協働し、一人ひとりの「決める」・「動く」を支援します

東日本大震災の経験を通して改めて認識した、女性の自己決定の重要性と行動の必要性を踏まえ、市民、諸機関・企業・団体と力を合わせて、エンパワーメントのための様々な事業を進めます。

自らの成長を  
実感できる組織風土を  
つくります



職員が多様なリーダーシップを  
発揮するために、組織のミッションを  
理解し、自らに限界を  
設けず専門性と能力を高める  
ことをバックアップします。





〔発行〕

公益財団法人

せんだい男女共同参画財団

〒980-6128

宮城県仙台市青葉区中央1丁目3-1

A E R 29階

T E L 022-212-1627

F A X 022-212-1628

仙台市男女共同参画推進センター

エル・パーク仙台

〒980-8555

宮城県仙台市青葉区一番町4丁目11-1

141ビル

(仙台三越定禅寺通り館)5階・6階

T E L 022-268-8300(代)

F A X 022-268-8304

エル・ソーラ仙台

〒980-6128

宮城県仙台市青葉区中央1丁目3-1

A E R 28階・29階

T E L 022-268-8041(代)

F A X 022-268-8045



公益財団法人  
せんだい  
男女共同参画財団  
設立20周年

2021年3月発行